

大正12年9月1日午前11時58分、一瞬激しい上下動、続いて大きな水平動、何かにつかまらないでは立ってもいられない。向かいの外科医局の屋根瓦が音をたてて落ちてくる。

どんなことになるのかと思ったが歩けない。天井が落ちてきたら机の下にもぐるより助かる方法はないという考えが頭をかすめる。ようやく大揺れがおさまって歩けるようになったので、まず病室へと一步廊下へ踏み出すと、もうもうたる黄煙、火事かと観念したが、それは落ちた壁の砂けおりであった。患者は意外に落着いていた。ことに女の患者が。看護婦はかいがいしく見回って、患者を元気づけている。

やがて患者に避難命令が出て、それぞれ適当な空地に搬出された。余震の間隔がだんだん遠くなってきたので、もう大丈夫と判断し、夜にならないうちに病室に戻した。

入院患者の世話以外には、近くからくる負傷者の手当と東京支部救護班に編入されるための出動だけで、あまり平素と変わらない。

病院から見渡す一面の火の海を見ては、誰いうとなく、赤十字としてこれでよいのだろうか、という声が院内に起きてきた。ことにわれわれが焼跡を視察した報告で、予想外に被害が大きいこと、救護の手が不足していることが判ってくると、この声はいっそう強くなってきた。

局員たちは、医局でローソクの灯を囲んで、被災患者収容対策を練った。廊下にもワラ布団を敷けば、800名(当時、平時収容365名)は大丈夫というところまで進んだが、さて下町、遠くは江東地区からどうして患者を運ぶかということで壁にぶつかってしまった。そのころ病院には軍から払い下げになった乗用車改造の患者車が1台きり、その上ガソリンは地震とともに嚴重な統制で手に入らない。一同なかば諦めているところへ2人の婦長が現れて、患者の輸送方法で困っているという話を聞いた看護婦たちが「私たちが担架を持って出かけて収容して来ましょう。この暑さだし、女のカだからいずれは途中で倒れるでしょうが、街の人たちも、それを放ってはおくまい、リレーしてでも病院に運んでくれるだろう。運搬のことは私たちにお任せ下さい」と申し立てますとの言葉、一同は感激すると同時に、救護の目的はついたと大喜びした。

天は自ら助くる者を助くとはよくいったもので、翌日になると、入院中の大倉組の重役から、「看護婦さんたちの健気な覚悟に感激した。運転手つきのトラックを提供しよう」という申し出があり、問題のガソリンも、私が内務省との交渉に難航しているのを傍で見て同情された某海軍少尉が、「こんなときこそ赤十字社に働いてもらわねば」と海軍の持ち分を分けてくれた。こういう思わぬ助けで、収容はようやくその緒に付いた。

その後、峯委員は市庁に出かけて30台ほどの乗合い自動車を借り入れてくるし、陸軍に縁故の多かった曾我医員の世話で、陸軍からも大量のガソリンが入ってきたので、収容は順調につづけられた。当初予定していた800人はおろか、にわか造りのトラック病棟と全国各地からの派遣された救護班の活躍で、最盛期には、峯医員が市庁でひろげた大風呂敷3000人収容が現実のものとなってきた。

それまで赤十字は戦時に働くものと考えていた国民も、このときの働きを見て、赤十字の平時活動にたいする認識を新たにされたわけで、まことに愉快であった。

いろいろの思い出が浮かんでくるが、その1つは食べ物のことである。交通は途絶え、食糧は入ってこない。手持ちの米の食い延ばしが第一と、西南戦争の主計将校であった老会計課長は、患者には白い飯を出すのが、われわれ職員には粥で、しかもこの粥もだんだん薄くなって、日がたつにつれて重湯同様となった。副食物は福神漬と沢庵だけであった。私などどうつむくと口からこぼれるくらい薄粥をつめ込むが、食堂を出たたん腹が空く、もう一度食べに食堂に入るわけにもいかず、そのまま空腹をかかえて普段の何倍も働く。これは他の人も同様で、外出すると、どんな缶詰でもよいかから買ってきて欲しいと、看護婦たちから頼まれたものであった。こういう食事がつづき、18日目にしてようやく常食に戻ったが、その時のことは今でもはっきり覚えている。苦しい状態がつづくなかでも誰一人として不平を言う者もなく、まことに気持ちよく働いたものである。

永く日本赤十字社の歴史に残る大震災の救護活動も、看護婦たちの、「倒れるまで私たちではこびましょう」の言葉で、その糸口が開かれたと確信している。

もっとも本社は、あの震災でほとんど全壊、衛生材料倉庫は全焼という有様で、いささか呆然の態であったようだ。とにかく看護婦の赤十字魂は、本社の本格的計画を促進させるに役立ったことは間違いない。

救護活動が軌道にのった9月中頃、病院の看護婦宿舍の集会室を臨時の事務所にしていた本社から呼び出しがきた。誰もいなかったので私が出かけた。多分、君たちの働きは云々と賞められることを予期しながら入っていくと、確か会計課の担当者であったと思うが、いきなり「君たち若い者の考えないのも困ったものだ、本社が地震後の復旧をどうしたらよいかと心配しているのも知らないで、あんな無謀な救護を始めるとは、本社はつぶれてしまわず」と賞められるどころか、きついおごごを喰らった。

上司たりとも承服できない言葉、そこで「若い者は無茶をやるとはまったく意外だ。この際あの惨状を見ながら赤十字がソロバンをはじいて何もしなかったら、それこそ本社はつぶれますぞ」とやり返した。

救護は立派に完了した。しかも本社はつぶれるどころか、震災を契機に社員は急に増加し、社屋も旧にもまして立派に復旧した。ソロバンのうまい会計課主任より、われわれの予見の方が正しかったわけである。

この体験から、赤十字がつぶれるのはソロバンを忘れたときでなく、その精神を忘れたときであり、赤十字精神の示すままに進むとき、その行動はけっして無謀ではないという信念を持つにいたったことは、震災救護活動から得た最上の賜物と思っている。

※筆者 神崎三益は、赤十字社中央病院の医員当時、救護員として関東大震災の救護に当たった。その後、秋田赤十字病院院長に栄転、武蔵野赤十字病院設立に当たり同病院院長として赴任。昭和49年まで同病院の発展に尽力された。(日本赤十字社80年史より抜粋)